

縁のものがたり

@アンプティーボーイ

◇下◇

試合のMVPに選ばれた。「なんでしようね。自信が出てきたのか、やる気が出てきたのか」。母の督子さん(45)は、声援にガッツポーズで応えた息子に、成長と変化を感じ取っていた。

今年1月、初めてPKを決めた。同点に終わった練習試合。キッカーの順番をどうするか話し合っていると、石井賢くん(9)は川崎市が自分で手を挙げた。アンプティーサッカーは片足を失った人がフィールドプレーヤー、片手を失った人がキーパーを務める。相手は大人。しかもボールは中学生以上が使う5号球だ。シュートは確かな威力を持って、ゴールネットに突き刺さった。まさに、「大人顔負け」だった。この試合のMVPに選ばれた。

楽しそうにドリブルをする賢くん
(鳥飼さん撮影の「amputee boy
一けんちゃん」から)



サッカー少年抱く夢



2015年のアンプティーサッカー日本選手権に参加したアウポラーダ川崎の選手や家族たち。賢くんは前列左端に納まっている
＝川崎市川崎区の富士通スタジアム

大人の勇気だったんです。賢くんは、学校の友達に交ざって普通のサッカーだってできる。「でもアンプティーの方がいい。大人とやるのが面白い」と笑う。チームの運営や練習の手伝いにも関わるようになった督子さんは「今、その理由がよくわかる。初めて会った時から、旧知の仲間みたいに賢を受け入れてくれた。あの人たちは、何も言わなくても賢の気持ちがるんだなって。本人はそれを言葉にはできないけど、子どもながらに感じてい

る部分があるのかもしれない」。チームのエースで、ブラジル出身の日系3世・エンヒッキ松茂良さん(26)は、日本にこのサッカーを広めた伝道師だ。日本代表でも常に背番号10を背負い、一人別次元のプレーを見せる。5歳の時に交通事故で足を失い、ブラジル代表にもなったテクニシャンは「もなげに言うのだ。別に片足がないからってできないプレーはない。オーバーヘッ

ドだってやるし、無回転フリーキックだって打てる。今から賢が一生懸命練習すれば、未来の日本代表ですよ」。ピッチで輝いているのは「できない」を嘆くのではなく、「できる」に変える努力をする彼らだった。熱く明くる仲間思い。どこにでもいるサッカー好きたちはそれでも、底抜けに優しかった。

賢くんを追い掛けるカメラマン・鳥飼祥恵さん(33)は、自然とチームメイトも撮るようになった。今や「チームスタップ」を自認する自身のフラインダーにも、いつの間にか変化があったことに気づいた。「最初はやっぱり、足に目が行っていたんですよ。写真の撮り方も、賢くんの『ない』が伝わるカットが多かった。でも今心配になるのは、彼が転んで膝小僧に作っただけのかさぶただったりする。『ない足』を意識することがなくなり、気づけば普通に少年を撮っている感じなんです」

撮影を始めた当初、「障害がある少年」を題材にすることに迷いもあった。周囲から批判を受けることは、今でもある。彼らの姿は、そんな心配まで簡単に吹き飛ばしてくれた。賢くんを撮った作品群は、カメラマンの登竜門・名取洋之助写真賞を受賞した。選考に当たった写真評論家の飯沢耕太郎さんは、こんな評を寄せた。〈人間関係が希薄になりつつある今、一人の男の子の成長をポジティブな眼差しで見守っている『ちょっとおせっかいな大人たち』の姿が、いきいきと浮かび上がってくる〉

カメラ越しに自分が感じていた「このチームの何とも言えない暖かい空気」は、しつかり写真に刻み込まれていた。9歳の少年はほとんど成長していく。思春期になり、あらためて自分と向き合う時もあるだろう。進学、恋愛、職業選択。そのどこかで「片足がないこと」が壁になるかもしれない。世間の無知な悪意や偏見にさらされることだって。生き方を悩み、行く先を迷うことがあるかもしれない。

でも、母の督子さんと鳥飼さんは確信に近い、共通の思いを持っている。「賢がそういう時期を迎えたとしても、彼にはアウポラーダの間がある。彼らの背中を見ていれば、きっと大丈夫」。賢くんには今、一つの夢がある。「サッカーではヒッキさんみたいにならなくって、日本代表になってワールドカップに出ること。あとはお医者さんになって、僕みたいなのがをした人を助けてあげたい」。ピッチの片隅。サッカー少年は、少し照れていた。(佐藤 将人)